

# 戊戌元日

山西無聞

顔子箎瓢樂

顔子<sup>がし</sup> 箎瓢<sup>なんびょう</sup>を樂<sup>たの</sup>しみ

犬儒棲大樽

犬儒<sup>けんじゆ</sup> 大樽<sup>おおたる</sup>に棲<sup>す</sup>む

空耗非可恥

空耗<sup>くうこう</sup>は恥<sup>は</sup>ずべきにあらざるも

食足辱榮存

食足<sup>しょくた</sup>りて 辱榮<sup>じよくえい</sup>存<sup>ぞん</sup>せり



今年の干支は戊戌（つちのえいぬ）なので、今年も年賀状には「犬」にちなんだ五言絶句を記載して送ることにした。

「いぬ」を表す漢字には「犬」と「狗」とがある。その違いは、「若し分けて之を言えば、則ち大なる者を犬と為し、小なる者を狗と為す」とある。また「角川大宇源」で調べてみると「犬・狗」のほかにも「獫」「獫」がある。「獫」は「おおいぬ。また猛犬」「獫」は「獵犬の一種、口先の長い犬」ということである。

「いぬ」は太古から人間に最も身近で親しく、勇猛かつ忠実な動物であるが、我が国では、名詞の上につけてくだらないもの（犬侍）、むだなもの（犬死に）や一見似ているが違ってゐるもの（犬蓼）を表すときにも用いられる。

中国においても、つまらない者（例えば「犬子」は豚児と同様で自分の子供の謙称）のたとえに用いられることもあるが、漢詩文においては、古く「老子」の中で「隣国相望み、鶏犬の声相聞こえ、民、老死に至るまで相往來せず。」とあるなど、平和な村里の象徴としてイメージ付けられている。

「いぬ」にかかわる故事成語は多数あるが一例を挙げる。

「跖の狗、堯に吠ゆ」（人はその主人のために善悪を顧みず、忠義を尽くすたとえ）出典は「戦国策・斉」で、次のような話である。

貂勃が常に齊の宰相の安平君田單をそしるので、田單はとくに酒席を設けて貂勃を招き、「わたしにどのような悪いところがあると先生は考えて、いつも朝廷でそしられるのか」と問うたところ、貂勃が「跖（盗跖とよばれた古代の大盗賊）の飼う狗が堯（古代の聖王の名）に吠えるのは、跖を貴んで堯を賤しむからではありませぬ。狗はもともとその飼う主でない者

には吠えるものです。」と答えた。なお、田單は貂勃を王に推薦し、その後、貂勃は田單のために活躍することになる。

さて右の五言絶句であるが、起句の「顔子」は、春秋時代の魯の人「顔回」のことで、孔子の弟子の中で最も優れた、德行第一に挙げられている人物。

「論語・雍也」に「子曰く、賢なるかな回や、一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り、人は其の憂いに堪えず。回や其の樂しみを改めず。賢なるかな回や。」とある。「簞」は、飯を盛る竹製の器、「瓢」は、酒・水などを入れるひょうたんを二つに割った器のこと。「陋巷」は、狭く汚い路地のことで、顔回が貧しくむさくるしい裏町に住みながらも、その生活を楽しんでいたことをいう。

承句の「犬儒」とは、古代ギリシアの犬儒学派（キニック学派）のこと。この学派は、禁欲主義で、物質的な快樂を求めず、犬のような乞食生活を送った。

その代表者のディオゲネスは大樽に住処にしていたことから「樽のディオゲネス」といわれた。ディオゲネスには次のような逸話がある。

アレクサンドロス大王がディオゲネスに会いたいと思ひ、来るように命じたが、応じないので大王が自ら会いに行つて、何か希望が無いかと聞くと、大樽の中で日向ぼっこをしていたディオゲネスが、「あなたがそこに立っていると日陰になるからどいてください。」といったという。

転句の「空耗」とは、何も無いことで貧乏のことをいう。

結句は「倉廩（こめぐら）実れば則ち礼節を知り、衣食足りて則ち榮譽を知る」を踏まえる。

「貧乏は決して恥ずかしいことではないが、顔回やディオゲネスはともかくとして、私のような凡人は衣食が十分で日々の生活が成り立ってはじめ、礼儀や節操をわきまえて、榮譽と恥辱を知ることができる。」という詩である。

## 型染の型紙とジャポニズム

さかもと ふさ  
（型染版画家、エディター）  
イラストレーター



型染アート「フィレンツェの旅」イタリヤ

©1996 FUSA SAKAMOTO

昨今西洋美術館で北斎とジャポニズム展が開催されている。ジャポニズムという言葉はアールヌーボーの時代に呼ばれていた。ジャポニズムとは日本の意味だ。

型紙については前回でも触れたが、型染の着物が盛んに染められた江戸時代は素晴らしいデザインでありながらも、消耗品として扱われてきたため、染色業者が廃業の折りに、まとめて海外に売られて、流出したのではないかといわれている。またシーボルトが持ち帰ったともいわれている。日本には残念ながら当時の型紙が所蔵されておらず、イギリス、ドイツ、オランダ、オーストリア、フランスのそれぞれの美術館に所蔵されている。

ウィーンのジャポニズムは、一八七三年のウィーン万博で日本は国を挙げて頑張った、三五〇種の和紙も出展された。また来年からウィーン世界博物館でシーボルト展が開催される。彼が持ち帰った型紙はウィーンのM A C美術館に八、〇〇〇点所蔵されている。私がウィーンで展覧会したとき、M A Cの型紙の展覧会に二回遭遇している。当時型紙はステンシルとしてヨーロッパで売られていた。型紙を使って和紙に染め出した完成作品をヨーロッパの人々は知らない。二十一世紀は過去のジャポニズムの復活だけでなく、更に進んだジャポニズム文化を打ち出してほしいと思っ願っている。

## 矢切の渡し（下） 関八州夢幻譚



## 池田 一 貴

九（承前）  
与えられた田部井村の農家で、源次楼と仲睦まじく暮らす百合の香は、不器量とはいえず、幼い面影をのこす初々しい新妻だと、周囲から好感をもって迎えられていた。

近隣の百姓らも源次楼を「旦那さん」、百合の香を「御新造さん」と呼んでくれる。源次楼がいつも長脇差の一本差しで出歩く姿をみれば、無宿渡世の博徒らしいことはすぐに察しがつくが、国定忠治親分が一軒家を貸してくれるぐらいだから、それなりに重んじられているのだらうと若夫婦に親切にしてくれた。源次楼も百姓には腰が低い。生まれは百姓家の次男坊なのだ。

特別な待遇には理由があった。初対面るときから忠治は、百合の香を妖怪の化身だと直感していたからである。狐や狸が人に化け、たばかることがごく普通に信じられていた時代である。美女はおろか醜女、妖怪にまで手を出す悪食の忠治が、尋常な女とは違う何かを背負った百合の香に気づかないはずがなかった。それは、半分は当たっていたのである。

狐や狸ではない、れっきとした人間なのだが、百合の香の家系は女しか生まれない女系の家で、しかも先祖代々特殊な遺伝を背負っていた。初潮

をみるまではただの醜女として育つが、女の月のものが始まると遺伝が発現する。満月の夜に限って発作が起き、顔のみならず四肢まで変身するのである。驚くほどの美貌、また小股の切れ上がった（現代でいえば脚の長い八頭身の小粋な）超美形になつてしまふ。しかし翌朝には元の醜女にもどるのである。

柴又村で百合の香に懇願され、しぶしぶ醜女との駆け落ちに応じた源次楼が、そんな事情を知つたのは、忠治一家にわらじを脱ぎ、農家を貸し与えられたのちのことだつた。源次楼は一連の事実を知り、百合の香に同情し、そして惚れた。二人は夫婦の契りを交わし、百合の香はその夜、身ごもつたという。

しかし、「ゲテモノ食い」忠治の欲望は相手の隙を窺つていた。八州廻り（関東取締出役）の道案内を務めた三室の勘助を裏切り者と考えた忠治は、勘助の殺害を、その甥である板割の浅太郎らに命じた。その夜、源次楼の留守を狙つて、忠治は一軒家に押し入り、力づくで欲望をとげた。入れ違いに帰ってきた源次楼は、半裸で泣いている百合の香を見てとっさに事情を察し、忠治を追つて大声で呼び止め、刀を抜いた。

十

「若造、いま、待て忠治、と叫んだか」  
「当たり前だ。ひとの女房を手籠めにしやがつて、無事でいられると思つたか。一宿一飯の恩義もへつたくれもねえ。この腐れ外道が！」

「ふん、俺の腕を知らねえらしいな」

忠治の撃剣術には定評があつた。半端でなく強い。武士でも一対一の真剣勝負に勝てる者は近隣にはいないだろうとまで言われている。

忠治は能面のような顔になり、源次楼を見据えて長脇差を抜いた。その構えや間合い、呼吸、どれをとつても一流剣士そのものである。まったく隙がない。源次楼は内心驚き、攻め方を変えた。相手が互角以上の力をもつ場合の秘技を使つて攻めることにしたのだ。腰の鞘を左手で抜き取つて刀のように構えた。

つまり源次楼は右手に抜き身の長脇差、左手にその鞘を構えている。左手がもし小刀なら、宮本武蔵の二天一流の構えである。

忠治の能面がふだんの表情にもどつた。

「ぶつ、なんだそりゃ。二刀流のつもりか。その鞘をすばつと斬つてやるぜ」

「斬れるもんならやつてみる。てめえの田舎剣術じゃ無理だがな」

「しゃらくせえ！」の言葉より速く、忠治の劍が鞘を斬った。かと思いきや、甲高い金屬どうしの衝突音がして、鞘は斬れていない。

「鋼の鞘か……小癩な」

「てめえの負けだ！」

じつは鞘は鋼鉄製ではない。通常の鞘に薄い鋼の板を巻きつけただけのものだ。これでも簡単には切れない。軽いから早業に適してもいる。

源次楼の左右から、というより上下左右から、連続して繰り出される「二刀」のめまぐるしい打ち込みは、忠治がかつて経験したことのない奇妙な、しかし恐ろしい劍術だった。息がつかない。忠治は焦った。

「な、なんなんだこりゃ」

二刀のうち一刀が真劍でなく鞘であるというのが、じつはこの秘技の真骨頂なのだ。受ける方はどうしても真劍の受けに重点をおく。無意識に鞘を軽視する心がはたらく。そこが罠だ。

惑う心の隙に、鞘が打ち込まれる。真劍をかわずの気を取られている隙を衝かれるのだ。事実、忠治は二度、頭の右側面をしたたかに打たれてしまった。さすがの忠治も視界が揺れた。体が平衡を失い、よろける。そこを狙って源次楼は右手の真劍で忠治を斬り捨てようとした。その刹

那、または半目の権左が大声を上げた。

「兄い、ままま、待ったあ！」

先ほどはこの権左の仲裁の掛け声で、板割の浅太郎ら九人との無駄な斬り合いを避けることができた。その同じ声が飛んできたため、源次楼は忠治を斬り捨てる寸前で、腕の動きを止めたのだ。「兄い。浅太郎らは仕事が早い。遠いが、あの松明を見な。風呂敷包みをぶら下げて帰ってくる連中を。包みは伯父の勘助の首に違えねえ」

ここで連中と遭遇したら面倒なことになる。とつさに源次楼は、鞘で忠治の首筋あたりを強打した。現代風にいえば延髄斬り（蹴り）に相当するだろうが、これで忠治は気を失った。二人は忠治を一軒家へ運び込み、百合の香を急かせて逃げ仕度をした。さいわい忠治の懐には数十両の金があつたので、源次楼はこれを奪った。

権左はここに残るといふ。忠治を助けた形にして恩に着せるのだろう。悪賢さだけで生き延びてきた権左らしい。

## 十一

源次楼と百合の香は月明かりを頼りに、とりあえず木崎の宿へと急いだ。一刻も早く忠治一家の縄張りから離れたい。日光例幣使街道を木崎から

太田へ向かい、太田から桐生道に入って南下し、利根川を越え、熊谷へ。そこからは中山道だ。

「源さん、力づくで操を奪われた私を許してくれるのかい。自害もせずに生き延びた私を、汚らわしいと思わないのかい」

「なにを馬鹿いつてやがる。野良犬に咬まれた女房をいぢいち離縁する亭主がどこにいる」

百合の香は歩きながらぼろぼろと涙をこぼしていた。(やっぱり源さんは私が見込んだとおりの男だ)と独り言を呟きながら。

問題は熊谷から先、中山道をどちらへ進むかである。江戸方面すなわち百合の香の故郷である柴又村方面へ進めば、まだ代官の追っ手が待ち構えているに違いない。人相書が出回っていれば捕まっておそれは十分にある。

ちなみに当時の人相書とは顔や体形の特徴を文章に記したものであって、絵ではない。しかし、これがよく特徴を捉えていて役に立った。例えば、国定忠治の人相書はこんな風に記されている。

「国定村 無宿 忠次郎(当寅 三拾才余)

一、中丈殊<sup>中丈殊</sup>之外<sup>の外</sup>太<sup>太</sup>り候<sup>候</sup>方<sup>方</sup>。一、顔丸<sup>顔丸</sup>く鼻筋<sup>鼻筋</sup>通<sup>通</sup>。

一、色白<sup>色白</sup>き方<sup>方</sup>。一、髪<sup>髪</sup>太<sup>太</sup>たふさ<sup>ふさ</sup>。一、眉毛<sup>眉毛</sup>こく  
其<sup>其</sup>外<sup>外</sup>常<sup>常</sup>躰<sup>躰</sup>。角<sup>角</sup>力<sup>力</sup>取<sup>取</sup>共<sup>共</sup>相<sup>相</sup>見<sup>見</sup>申<sup>申</sup>候<sup>候</sup>」

つまり忠治は、中背だがかなり太っており、一

見、相撲取り風。しかし色白で鼻筋が通り、眉毛の濃い、なかなかの男前だったらしい。

日光無宿円藏(日光の円藏)の場合、身体の特徴に加えて「言舌<sup>言舌</sup>下<sup>下</sup>野<sup>野</sup>なまり」と方言まで記されている。上州の役人なら下野方言を聞き分けるからであろう。

源次楼は熊谷の宿で考えに考えた末、やはり江戸方面は危険と判断し、西へ向かうことに決めた。上方で博徒から足を洗って正業に就き、子を育てよう、と。百合の香はその決意をことのほか喜んでくれた。

## 十二

田部井村から逃亡して七日後、満月の夜を迎えた。二人が夫婦の契りを交わしてから初めての満月の夜である。

この夜には、二人の将来を決める重大な儀式をしなければならぬ。

百合の香は当然、いつもの発作に襲われ美女に変身する。しかし、この日の身化けだけは特別である。左右の胸にそれぞれ開と閉の文字が浮かび上がるという。しかもそれは契りを交わした夫にしか見えない。

百合の香が母親から聞いた話によれば、「開」

を強く押せば、次の満月から毎月、絵地図のような刺青が百合の香の全身に浮き出るようになる。それは毎月異なる絵図で、一年前後の期間、それを次々と記録していけば、ある埋蔵金の場所が判明するそうだ。母は祖母から豊臣の埋蔵金ではなからうかと聞いているが、真相はわからない。

この体質が遠い先祖から代々受け継がれたものなら、浮き出る刺青がただかか二百年前の豊臣埋蔵金の絵地図であるはずがない。また、もし何かの埋蔵金だとしても、過去の母系の夫の誰かが、もうすでに発掘してしまつたかもしれないではないか。だから埋蔵金ではない何かの絵図が現れるに違いない——百合の香はそう考えている。だが百合の香自身はそれを見ることができない。夫にしか見えないのだ。

さらに「開」を押した場合、百合の香の容貌体が美女に身化けしたまま固定される、とも聞いた。一方、「閉」を押したら、満月の夜の発作と変身がもう起こらなくなるかわりに、容貌肢体は不器量のままで固定される、という。

これを聞けば、ふつうの男なら「開」を選ぶだろう。美女に生まれ変わる話といい、埋蔵金の話といい、いかにも「開」を押せといわんばかりの言い伝えである。

源次楼も、押すなら「開」しかねえ、と最初は考えていた。しかし、どうにも胡散臭い。何度も考え直した。うーん、こりゃ丁半博奕と同じだ。丁半では目が出る確率は一般に半々と思われているが、実際には丁が出る回数が多い。丁目は有利、半目は不利なのだ。半目の権左は何ごとによらず不利なほうに賭ける癖があるから、この渾名がある。

では、この開閉勝負ではどちらが不利か。明らかに閉のほうが不利である。ふつうなら開に賭けるだろう。しかし、この勝負に遭遇すること自体が稀も稀、稀有なことだ。稀有な勝負なら、稀有に賭ける。不利に賭ける。これが、俺にとつては人生最後の博奕になるだろう。ならば大勝負だ。俺は不器量な百合の香に惚れた。だから不器量に賭ける。源次楼はそう決めた。

## 十三

どこの宿でも旅籠は相部屋が常態である。しかし満月の夜の発作を他人に見られるのはまずい。源次楼は旅籠で、宿賃をはずむから二人きりの部屋にしてくれと頼み込んだが混んでおり、やつと与えられたのは蒲団部屋だった。

「悪いな。我慢してくれ」



「源さん、御前おまへと二人なら私は野宿でもかまわないよ。ここなら文句はないさ」

前回とほぼ同じ時刻に発作がはじまった。百合の香は小半刻こはんせき（約三十分）ほど苦しんだあと、目の醒めるような美女に変身した。胸にはたしかに開と閉の刺青が浮かび上がっている。

源次楼は「閉」を強く押した。釦ボタンを押すように。すると、ひどい衝撃が走つたらしく、百合の香は気を失って倒れた。

母の話が確かなら、百合の香は不器量な姿に戻って目を覚ますはずである。しかし違った。美女のままである。

明日の朝になれば元の容姿にもどるだろうと二人は思っていたが、翌朝も変わりが無い。美女のまままだ。旅籠の女中が「奥さんが入れ替わった」と騒いでいる。駄賃を渡して騒がぬよう頼み込み、早々に立ち去った。

## 十四

あれから十年――

源次楼と百合の香は九歳の女兒を連れて武蔵の国の柴又村を訪れた。いや帰省したのだが、百合の香をかつての不器量な娘と同一人物だと思ふ人はひとりもいなかった。母親を除いては。

結局、百合の香は、美女に変身したまま元にはもどらなかつたのである。埋蔵金など代々の言い伝えは夫の愛情を試すためだったのか。

田部井村から逃亡したあと、源次楼は博徒稼業から足を洗い、上方で丁稚奉公を始めた。特別に夫婦での住み込みが許された。誰もが見惚みとれるほど百合の香が美人だったおかげでもある。商売では源次楼の努力が主人や番頭から見込まれ、早くも五年で暖簾ねんせんわけしてもらい、店を出して繁盛した。もし江戸でも同じ商売が営めるのなら柴又村へ帰ろう、という源次楼の提案に百合の香は泣いた。年老いた母が心配だったからである。

源次楼の商売は江戸でも繁盛した。おもに刀剣を扱う道具屋だが、源次楼の目利きが信頼されて、武家など多くの顧客がついたのである。刀の良し悪しを見分ける目は確かだった。時あたかも幕末にさしかかり、騒乱の巷に刀剣の需要が急増していたことも商売には幸いしたのだろう。

源次楼は江戸市中の店舗に信頼できる番頭を置き、自身は柴又村と行き来していた。柴又には妻子と義母がいる。

暇なときには矢切の渡し付近で舟を出し、頬かむりをして利根川で釣りを楽しむ。ある日、破れた道中合羽の渡世人が堤から声をかけてきた。

「今日は渡し舟の爺さんが寝込んでるらしいから、悪いが向こう岸まで乗せてつちやくれめえか。礼はするぜ」

「それはお困りでしょう。どうぞ」

「ありがてえ、と言いい、渡世人は乗り込んだ。」

「旅人さん、どちらから」

「上州だ。あそこは蚕かいこと絹織物で潤つてるから博奕打ちにやいい仕事場さ」

「上州じゃ国定忠治親分が磔はりつけにされたとか」

「ああ二年前にな。見事な最期だったぜ。あの人は大俠客だった。後世語り草になるだろう」  
対岸に着くと、渡世人はいくら払えばいいかと訊く。

「いえ。お代は結構です。おめえさんのおかげで忠治親分を殺さずに済みましたからね」

「えっ……」

哑然としている半目の権左を対岸で降ろすと、源次楼は深々とお辞儀をして、おもむろに權かきを回した。  
(完)

【この物語はフィクションです。一部に西欧のアーサー王  
説話からヒントを得た部分もあります】



(表紙説明)

■瓦せんべい

明治初期、「地元ならではの新しい土産品を作る」との思いから、白下糖（和三盆の前段階）と小麦粉を用い、高松城の瓦をモチーフとして生み出された菓子。香川を代表する銘菓のひとつ。

株式会社 宗家くつわ堂

所在地／香川県高松市兵庫町四一三

TEL／〇八七―八五一―九二八〇

FAX／〇八七―八五一―九二八二

「酒林」随筆特集 第九十五号  
平成三十年一月一日発行

発行人 西野 信也

印刷所 株式会社 太陽社

発行所 西野金陵株式会社

高松市魚井町二番地八

万一乱丁・落丁がありましたら、ご一報下さい。

# 西野金陵株式会社



## ■酒類部各事業所

- 〔本店〕  
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
- 〔高松本社〕  
〒760-8544 香川県高松市亀井町2-8 ☎087-835-4133
- 〔高松支店〕  
〒760-0064 香川県高松市朝日新町33-40 ☎087-851-4133
- 〔丸亀支店〕  
〒763-0083 香川県丸亀市土器町北1-70 ☎0877-23-4133
- 〔徳島支店〕  
〒770-0944 徳島県徳島市南昭和町3-53-4 ☎088-653-4133
- 〔松山支店〕  
〒790-0925 愛媛県松山市鷹子町546-1 ☎089-975-4133
- 〔岡山支店〕  
〒701-0221 岡山県岡山市南区藤田錦564-209 ☎086-296-2136
- 〔洲本支店〕  
〒656-0012 兵庫県洲本市宇山3-5-28 ☎0799-22-0788
- 〔大阪営業所〕  
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-4133
- 〔東京営業所〕  
〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4 西野金陵ビル9F ☎03-5543-4133
- 〔観音寺物流センター〕  
〒769-1613 香川県観音寺市大野原町花稲1071-1 ☎0875-56-3133
- 〔多度津工場〕  
〒764-0028 香川県仲多度郡多度津町葛原1880 ☎0877-33-4133
- 〔琴平工場〕  
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
- 〔金陵の郷〕  
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133

## ■化学品事業部各事業所

- 〔大阪本社〕  
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2444
- 〔大阪支店〕  
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2447
- 〔東京支店〕  
〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4 西野金陵ビル9F ☎03-3552-3427
- 〔名古屋支店〕  
〒450-0002 名古屋市中村区名駅4-26-13 ちとせビル5F ☎052-561-5531
- 〔北陸営業所〕  
〒918-8231 福井県福井市間屋町3-815 和中ビル1F ☎0776-24-0967
- 〔上海西野貿易有限公司〕  
中国上海浦東外高橋保税区基隆路6号 ☎+86-21-6278-9548
- 〔NISHINO KINRYO (THAILAND) CO.,LTD.〕  
159/40 Serm-Mitr Tower 26th Fl. Room No. 2606, Sukhumvit 21 (Asoke) Rd. Kwaeng klongtoey-Nua, Khet Wattana, Bangkok 10110 ☎+66-2-661-7014

## 〔PT. NISHINO KINRYO INDONESIA〕

- Sampoerna Strategic Square South Tower Level 30 Room No.6 Jl Jend. Sudirman Kav 45-46, Jakarta 12930 INDONESIA ☎+62-21-2993-0822



西野金陵株式会社  
四国・琴平